

「生命の教育」創始者谷口雅春先生 今月の言葉

# 親の心や言葉を変えれば子供は勉強好きになる

子供に「できない」と印象させてはならない

今までの教育家のやっておられる教育法を見ますと、大抵は人間のわるいところを見附けまして、それを「ここがわるいから直せ」というふうなことを常に言ってきたのであります。そうして「お前は出来がわるいからよく勉強せよ」というような調子で教えて来たのであります。そうするとその子供はどういうふうになって行くかといいますと、「お前が出来がわるいから」とこう言われると、言葉の力によりまして、「自分は出来がわるい」ということを強く強く心の底に印象させられるのであります。そうして「出来がわるいからやれ、やれ」と言われますと、「私は出来がわるいのだ、やらなくちゃならない」と思いますが、心の底に、「自分は成績がわるいのである、頭がわるいのである、よく出来ないのである」という強い信念がその子供の潜在意識に強く印象しておりますから、勉強しようと思っても勉強に興味がないのであります。それをいやいや「出来ない出来ない」と思いながら勉強しましても、本当にその勉強が心に這入らない、そのため、いくら勉強をしても、その効果が挙がらないということになるのであります。こ

い」ということを強く強く心の底に印象させられるのであります。そうして「出来がわるいからやれ、やれ」と言われますと、「私は出来がわるいのだ、やらなくちゃならない」と思いますが、心の底に、「自分は成績がわるいのである、頭がわるいのである、よく出来ないのである」という強い信念がその子供の潜在意識に強く印象しておりますから、勉強しようと思っても勉強に興味がないのであります。それをいやいや「出来ない出来ない」と思いながら勉強しましても、本当にその勉強が心に這入らない、そのため、いくら勉強をしても、その効果が挙がらないということになるのであります。こ

れが言葉の力であります。

(新編『生命の實相』第47巻7〜9頁)

### 親の心や言葉が子供に強く影響する

多くの子供達は、親が間違った心の波を起し、間違った言葉の波を起している為に非常に損われているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪しきことばかりを見附けて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛うじてよく出来たにしましても、大いに伸びるということは出来ないであります。「勉強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、已むを得ず「お前はそんなことでは出来ないから勉強せよ」と言うのだという人があるかも知れませんが、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うと、いくら勉強しても却って心に憶えないのであります。これは又おかしな現象で

ありますが、原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」というような親は、子供に対してどういふ心の態度を執っているかと言いますと、「お前は出来がわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。出来るに定っておれば、「勉強せよ」とは申しません。「出来がわるい」と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」ところいうのであります。

「うちの子供は出来が悪い」と、言葉に出さなくとも、心に念うだけでも一つの波を起すことあります。親又は教育者が、心の中で、「この子供は出来がわるい」という精神波動を起しまして、その子供をそういう心で見詰めている限りは、その子供は決して学習がよく出来るものではありません。勉強室にいまして、勉強しているような真似をしておっても、心は親の心で縛られておりますから、勉強が愉快でないのであります。

(新編『生命の實相』第47巻17〜18頁)

子供に「無能力」の自覚を与えること

勉強しないといっても、やはり学校で先生に習った時には、本も見、先生の話も聞いています。本を見、先生の話もきいているからやはり一度は頭に這入っているのです。ですから、「一遍習ったことをいつでも思い出せる状態に置いたならば、家へ帰っても学習しなければならぬ」ということは必ずしもないのであって、「一遍憶えたことを試験の時や入用の時に思い出さえずれば、それで勉強しなくても百点がとれる」ということになるのであります。それが、憶い出せない。憶い出せないようにしているものは何であるかというところ、「人間は直ぐ忘れっぽいものである」という一つの「間違の信念」であります。(中略)「人間は忘れる動物だ」との間違の信念を如何にして打ち破るかというところ、それには「人間は神の子である、全智全能の神の子であって、全智全能が自分の頭にあるのだから決して忘れるものではない」という

大自覚を人類に与えることが必要なのです。(中略)常に子供に対して「あなたは神の子ですよ。神の子だから必ず頭がよくて記憶力は好いのですよ」ということを教える。「あなたは神の子だから、本を一遍読んだら決して忘れるものではありません。先生から一遍聴いた話はどうも決して忘れやしいのですよ。必要な時には必ず思い出せる」ということを常に言葉の力によって生徒たちの頭に印象するようにするのであります。そうして試験場又は実際問題に莅んだ時に、「人間は神の子である」ということを思い出して「自分は神の子だから、必ず憶い出せるのだ。必ずよい考えが浮んで来るのだ」と、こう心に唱えて、心を落着けて、さて問題に対したならば、必ずそこに出されている問題に対する適当な回答が思い出されてくるのであります。人間の能力を發達せしむるには、そういうふうな子供のとときから「我は神の子、無能力」の自覚を与えることが肝要であります。

(新編『生命の實相』第47卷45〜47頁)